

FGO短編

bobbob

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

不定期に思いついたことを短編にして書きます。
基本一話完結。

北風
(暴君) と太陽
(ローマ)

目

次

北風（暴君）と太陽（ローマ）

止められるはずもないと少年は思つた。

目の前の光景はもはや常人が割つて入れる場所ではなかつた。

傍らの少女、マシユも呆然としていた。

彼の眼前の荒涼とした大地には一人の男が離れて向かい合い立つていた。

1人は金色の鎧をまとう者。

1人は真紅のマントをはおり立つてゐる。

それだけならば問題はない、ただ声を掛ければいいだけの話だ。だがそれは無謀に等しい。

金色の男の背後が歪む。

歪んだ空間から無数の何かが発射される。

それは名剣だ。

名槍だ。

棍棒だ。

魔斧だ。

人が想像し、想像しうるありとあらゆる武具が凄まじい速さでマントの男に襲いかかる。

次の瞬間にも男はマントごと赤いひき肉にされる筈だ。

しかしそれは起こらなかつた。

突如として地が裂け城壁がせり上がり、槍を受け止め、もしくは弾き返した。

更にそこから無数の大樹が生え、金色の男が射出した武具を圧倒的な質量で飲み込みながら金色の男へ迫る。

が、その大樹も金色の男の圧倒的な物量を前にしては押し潰せず、二人の中間地点で拮抗していた。

艦隊の一斉砲撃すらかくやと言う圧倒的な数の暴力と、同じく膨大なまでの質量の暴力がそこでぶつかつっていた。

ぶつかり合うたびに凄まじい衝撃波と瓦礫が発生しては消されていく。

その凄まじい余波は離れた二人にも容赦なく降りかかる。

けがをする程ではないが、バランスを崩しそうになつたり、吹き飛びそうになつたりするほどだ。

「どうしてこうなつたんだろうね、マシユ」

少年は踏ん張りながら、傍らの少女に話しかけた。

「……分かりません」

マシユと呼ばれた少女は首を振った。

かの魔術王ソロモンにより世界の理は絶たれ、人類の未来は焼却された。

しかし唯一、誤算があつた。

国連に属する魔術機関カルデアだ。

たまたま紛れ込んだ一般応募の少年が、そこで働いていた心優しき少女マシユ・キリエライトと共に理を修復するなど誰が想像したろう。

少年はマスターとして、過去英靈と呼ばれる偉人や人物をサーヴァントとして召喚し、ある事故から英靈と融合したマシユと共に人類史の焼却に抗つたのだ。

幾つかの事件を解決した後、彼がカルデアにて休んでいた。

その時にマシユがマスターの部屋にやつてきて告げた。

「ギルガメッシュとロムルスがいなくなつた？」

少年はマシユに問いかける。

「ええドクターによると、どうもアメリカ大陸にいるようです」

ラフな格好をしたマシユが告げる。

ギルガメッシュ、人類史における最古にして最大の英雄であり、自らを英雄王と称するはたから見れば傲岸不遜を地でいく金色の王である、しかしながら少年から見れば、深い英知も持ち合わせており、ただ傲慢なだけの王ではないことを知っている。

ロムルス、人類において大きな影響を生み出し続けたローマ帝国、そのローマの始まりを築いた建国の王である。人類、世界すべてがローマであるという独自の哲学を持つており、いついかなる時も少年

たちを見守る父のような王である。

少年は首を傾げた、そもそも彼らに接点など無いはずだ。

例えではあるがロムルスと同じローマの英靈である天才的な頭脳を持つ剣の英靈、シーザーことガイウス・ユリウス・カエサルであれば、時代が違つてもファラオと呼ばれるニトクリスやラムセス二世ことオジマンディアスと接点がある。

ローマ帝国とエジプトが彼の死後アクティウムの海戦をやらかしているのは別として、彼自身は深くエジプト出身のクレオパトラを愛していたため、その縁でいくらかの関わりがあつてもおかしくはない。

しかしながら、ロムルスとギルガメッシュにはそれがない。

同時代を生きたわけでもない。
同郷でもない。

関わりがないのだ。

「悩んでもいて仕方がないか」

マスターはそう呟くと部屋の椅子から立ち上がり、マシューと共にアメリカ大陸に飛ぶことにした。

そして冒頭に戻る

もはやそこがなだらかな大地であつたことは誰も信じないだろう。巨大な隕石でも降つたのかと言えるほどに彼らの周りは破壊しつくされていた。

いや、現在進行形で破壊が進んでいる。

辞めるように声を届かせたくても爆音が鳴り響き二人には届かないだろう。

ではサーヴァントのマスターである少年が持つ3回までの絶対命令権、どんなサーヴァントでも命令を聞かせることが出来る令呪なら戦いを止められるだろうか？

答えは否である。

通常のサーヴァントなら問題ないが、この二人に限つては不可能である。

まずギルガメッシュだが、彼が使っている宝具……サーヴァントとしての武器は、ありとあらゆる財宝、及びその原点が収納されている蔵である。

一部の例外を除いて彼の蔵はサーヴァントが扱う武具、つまり人類が生み出した道具全て（正確には原点）が収納されている。

その蔵の中には当然令呪も収納されているし、その命令を無視できるような効果を持った宝具も大量に存在しているからだ。

ロムルスの場合は、皇帝特権EXというスキルが問題である。

これはありとあらゆるスキルを一定時間習得し、行使できるという破格のスキルである。

その扱えるスキルのランクは特権スキルの評価によつて左右される。

つまり評価規格外のEXもちのロムルスはありとあらゆるスキルを一定時間、超高精度で扱うことが可能なため、その特権を用いて、令呪を弾ける対魔力スキルを習得すればいいのだから。

少年は頭を抱えながら相棒であるマシユに目を向ける。

その意図をマシユは正確に理解し、首を振った。

「私の宝具でも難しいかと……」

マシユの宝具「いまは遙か理想の城」（ロード・キャメロット）は巨大な城を顕現させ、味方に守護と加護を与えるものだ。

確かに二人のど真ん中に顕現させ、大樹と宝具の砲撃を遮断することで戦闘の中断は一時的には可能ではある。

しかし、そこで二人が宝具の真の力を解放した場合とんでもないことになる。

ギルガメッシュの奥の手は自ら持つ世界を切り開いた剣、エアの魔力を伴つた一撃「天地乖離す開闢の星」（エヌマ・エリシユ）である。この前にはあらゆる防御は意味をなさず、空間ごと断絶しながら相手を消滅させる技だ、マシユの作り出した城でもひとたまりもない。

ならロムルスの宝具はどうだろうか？

これもまたキツイ、ロムルスの宝具、「すべては我が槍に通ずる」（マ

グナ・ウォルイツセ・マグヌム）は大樹が過去・現在・未来のローマを形作り、押し流し、飲み込み、潰す巨大質量兵器ローマである。

オジマンディアスより前のファラオであるクフ王のピラミッドは600～700万トンと言われているが、それと同格、もしくは上回るレベルの巨大質量が直撃するのである。

流石の城も碎けかねないだろう。

どちらか片方なら令呪による支援で耐えれるかもしねいが、二つは無理である。

マシユもマスターたる少年も頭を抱えた時声が聞こえた。

「私は貴様が気に入らぬ、建国王よ」

ギルガメッシュが真剣な声音で言葉を発した。

見下のでも、憐れむのでもない、かといつて嫌悪感で言つたのでもない。

普段のギルガメッシュからはあまり想像がつかない声だった。

「私（ローマ）もお前が気に入らぬ、原初の英雄王」

ロムルスもまたその声に答えるかのように言つた。

「……であろうな建国王、そなたから見れば我もまたローマと言う世迷いごとをいうのであろうが」

ギルガメッシュは真っ直ぐロムルスを見ながら言つた、それはまさしく目の前の男、ロムルスを自らに並びうる存在として認識しているからだろう。

「そなたもまたローマだ、だが英雄王、その振る舞いを私は受け入れられない」

ロムルスも淡々としながら言葉を返す。

「どういうことなんでしょう？」

マシユは首を傾げた、二人が争つてゐるには似つかわしくない声で会話をしているのがどうも引っかかる（その間も大樹や城壁と無数の武具が激突しているが）。

「…………」

マスターである少年は考え込む、彼は、ロムルスとギルガメッシュ

が相容れない訳が言葉には出来ないがなんとなく分かつた。

恐らく、二人の考え方从根本上から相容れないのだろう。

ではその相容れないものはなんなのか？

彼にはそれが分からなかつた。

「どうやら、なんとなく分かつて、いるが答えが出てこんようだな」突如一人の後ろから声がした。

マシユが武器である盾を構えながら少年をかばおうと前に出て、そして気が付いた。

「イスカンダルさん!!」

征服王イスカンダル、またの名をアレキサンダー大王。

蒼き狼と言われたチンギスハンに次ぐ面積を征服した偉大な王。多くの英雄を従え、霸道を行つた王であり、ライダーのクラスで召喚されたサーヴァントである。

「どうしてここに、ライダーには分かるの？」

少年はイスカンダルに問いかける。

あの争いはなんなのか、二人は何故相容れないのか。

その意味を込めて少年は尋ねた。

「ふむ、ここに来たのは王としての勘よ、マスターたちも来ておると踏んでな」

イスカンダルはどうやら二人がぶつかるのを予期してここに現れたらしい。

更にそのまま言葉を続けた。

「あれはいわば問答のようなものだ、時が過ぎればやがて終わる」

イスカンダルはどつかと腰を地面に下し、二人にも座るように促した。

「問答、あの戦いが問答ですか？」

マシユは首を傾げながら言つた。

「その通りよ、あの一人は似てゐるようで相容れぬ」

イスカンダルはそういつて少年たちを見ながら続けた。

「ギルガメッシュ、英雄王はな、裁定者のようなものよ」

「……裁定者ですか？」

マシユがイスカンダルに聞き返した。

「うむ、英雄王は余たちとは違う目線で物事をみておるのよ、人の弱さも醜さも強さも美しさも理解しながらな」

少年は依然ギルガメツシユとの会話の事を思い出していた。

『人に価値はない、作るものには価値がある』

そのようなことをギルガメツシユは言っていた。

「だからこそ、英雄王は人をためすのよ、自分の出す強烈な試練を乗り超えて驚かせて見せよとな」

人が作り出すものは価値がある、けれどそれを生み出す人間は価値がない。

だからこそギルガメツシユは試練を与えるのだ。

それを乗り越えた時初めて人間は価値があると言えるから。

逆を言えば乗り越えられないものは価値がない凡百の物と言うことになるのだろう。

所謂ツンデレ？というやつだろうか、ただし失敗すればその時点で切り捨てられる強烈なものだが。

自らをルールとし、そのルールの枠組みで人を見て、試練を与える。他人とは一切違う視点から、立場から人に接する。まさしく裁定者と/or ふさわしいだろう。

「だが、ロムルスは違う」

イスカンダルは面白そうに言う。

「ロムルスも、人の長所も欠点も理解しておる、理解して全てを受け入れて愛しているのさ」

ロムルスにとつて世界も人もすべてがローマだという。

全てを受け入れて愛しているということは、全てを認めている、価値があると肯定しているということに他ならない。

だからロムルスは人を成長させる試練は与えても試すことはしない。

その試練を超えて、超えられなくても彼には愛すべきローマたる人に変わりないのだから。

自らもローマであり、世界も他者もローマである以上ロムルスは人と共に歩み、見守り続けるのだろう。

裁定者たる英雄王は一介の人間とは隔絶した視点を持つ。誰も英雄王の真意を理解することも出来なければ、共に歩むことも難しい。

嘗て いたと言う友を除いて、ギルガメッシユは一人にしか成れない、ならざるを得ない。

裁定者としてあり続けなくてはいけない。

それは「個」としての究極の1の形。

ロムルスのローマ、愛は受け継がれていく。

誰かの愛に触れ、薰陶し、自らの愛とローマを作り出していく。力エサルも、カリギュラも、ネロも自らの愛とローマを生み出し引き継がせている。

その大元に真紅の神祖、偉大なる建国王としてロムルスはある。

それは「集団」としての究極の1の形。

「英雄王が、試練を乗り越えられなかつた人間や墮落した人間を価値がないと断じても、建国王はそれを認めない、人間は、愛はあるだけでも尊く価値があるものだと」

イスカンダルは遠くを見つめるように続けた。

「どちらもその根底には人間贊歌があるんだろうが、過程がまるで違う以上あの二人は相容れまいよ」

マシユはぽつりとつぶやいた。

「北風と太陽の話みたいですね」

確かにそうかもしない、試練を与える北風のギルガメッシユとあるがままを受け入れる太陽のロムルス。

これでは確かにお互いが気に入らないだろう。

「…………じゃあ、問答のような物つて？」

少年はイスカンダルに問い合わせた。

2人が相容れない理由は分かつた。
では何故戦闘しているのだ？

「そりや、お前さんよくあるだろう？ホレ、日暮れの原っぱで自分たちが納得するまで殴り合うみたいな奴が」

「そんな青春ドラマ的な理由なの!?」

確かにお互の奥の手も使用していない、カルデアに負担がかからないのは2人が高ランクの単独行動スキルを使って戦闘しているからだろう。

「それならまあ、いいんじゃないでしょうか」

マシユが気の抜けた表情で言う。

イスカンダルの言が正しければ、このまま待てばいずれ二人とも戦闘を辞めるだろう。

「おお!! 実に見^べたえがある。マスターもマシユも座つて眺めたらどうだ、何分まだ当分終わらんぞ?」

エミヤからくすねできたのだと云いながら、イヌカンタルは酒と肉、飲み物をマントに纏された背中から引つ張り出した。

無言でマシユと少年はジュースを受け取りながら思う。

「で、二人はいつ戦いを呑めるんだよ……」

からない。

となりてイスカンダルは良いものだと『いながら眺めて』いるか手したらイスカンダルも余も混ぜてくれと乱入しかねない。

そうなれば最後 数万の軍勢と神牛の戦車が投げやりと雷を落とし
蹂躪し、大樹が砂漠を片つ端から破壊し、宝具の雨がすべてを薙ぎ払
う最悪の結果になりかねない。

つまりマシユと少年はイスカンダルが乱入しないように見張りながらじーーーつと待つしかないのだ。

イスカンダルの後ろにいても襲つてくる強烈な余波に耐えながらだ。

(帰りたい……)

結局日が暮れるまで二人はぶつかり、勝手にカルデアに帰つていつた。

それからは、特に二人とも問答と言う名の対決はしていない。
けれどネロがロムルスとギルガメッシュが何も言わずに酒を飲んで
いる姿をたびたび見ると教えてくれた。

たぶん二人は分かりあつた訳ではないのだろう。

けれどロムルスにとつてギルガメッシュももちろんローマである
し、ギルガメッシュにしてもロムルスを自身が認めるに値する英雄で
あると判断したのだろう。

北風と太陽。

二人は正反対な英雄だけど、心の底では同じく人間贊歌を謳つてい
る。

次に行くであろう特異点は人間否定の魔の神代。

そこでも彼らは曲がらず、折れずに進み続けるだろう。

人間には価値があるのだから。